

サーフィンのオリンピック種目化がもたらす意義と課題

その他のタイトル	Implications and challenges of making surfing an Olympic sport in Tokyo 2020
著者	水野 英莉
雑誌名	関西大学人権問題研究室紀要
巻	80
ページ	25-40
発行年	2020-10-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00021359

サーフィンのオリンピック種目化が もたらす意義と課題

水野 英莉

はじめに

こんにちは、水野英莉と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。「サーフィンのオリンピック種目化もたらす意義と課題」ということで、お話をさせていただきます。

私の専門、バックグラウンドは、社会学とジェンダー論になります。それから、サーフィンは20代半ばから20年以上続けてきて、趣味でもあり、研究対象でもあります。エスノグラフィーを書きたいと思いながら、フィールドワークをしてきました。今日はそういった調査と自分自身のスポーツ経験とを交え、ジェンダーの視点から読み解いていきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

初めに、サーフィンは先ほど井谷先生からも御紹介いただきましたが、2020年に東京オリンピックで、初めてオリンピックの種目になります。そうしたことがサーフィンにもたらすことというのは、どういふことなのかをテーマに検討してみたいと思ひます。

まず、サーフィンのイメージですが、私が「サーフィンをやってる」といふと、女性では少なく、そんなに多くないせいか、「かっこいいね」とか、「自由そうだね、楽しそうね」とよく言われます。サーフィンは、メジャースポーツよりは、かなりまだ人口は少なく、例えば、サッカーのFIFAの協会が発表するよふな、サッカー人口は2億6,500万人といわれていたり、テニスは1億1,000万人といわれていたりします。

それに対して、ISA (International Surfing Association) という組織が発

表している数で、3,500万人とされています。アジア地域では600万人、日本はそのうち200万人ぐらい。ただ、このデータは本当に長年変わっていないデータで、正確さに欠けるとも言えますが、大体の目安にはなるかもしれません。

男性と女性の割合は、私自身の実感からしても、女性2割、男性8割が大体のイメージです。本当に冬の寒い時期になりますと、水平線と地平線を見る限り男性しかいないというときも、たまにあったりするのですけれど、現在は増加している状況になります。

オリンピックにおけるサーフィン競技は、千葉県長生郡一宮町にある釣ヶ先海岸、通称、志田下と言われるところで行われる予定です。女子20名、男子20名で、ショートボードでの競技です。サーフィンにはいろいろなタイプのボードがありますが、ショートボードは短めのボードで、2メートル弱ぐらいの長さです。短い分、不安定ですが、鋭いアクションが可能になります。

この志田下という地域は、関東のサーフィン道場に例えられるようなところで、非常にいい波が来ます。競技志向のアスリートの人たちがしのぎを削って練習するところです。サーフィンは、それまで何度もオリンピック種目にしたいという動きがあったんですが、なかなかそれが実現しなかったんです。ここに来て急に実現することになったんですけど、一説には、例えばスケートボードも種目化されるんですが、そういった若者が好きな、メジャースポーツとは少し違うけれども、いわゆる横乗り系と言われていたりするタイプのスポーツをやって、オリンピック離れをしてる若い人たちを取り込みたいという考えがあるようです。

では、このオリンピックの種目になるということが、どのようなものをもたらすのかを考えてみたいと思います。サーフィン独自の性質にも関わる問題でもあり、ジェンダー問題にも関わってくるので、そこを見ていきたいと思います。

3つの仮説を立てました。1つは、人口や市場が拡大するのかという点。

オリンピックの種目になったら人口が増えるんじゃないか、市場が拡大するんじゃないか、人気で物が売れるようになるのではと言われますが、それはどうでしょうか。

2つ目が、サーフィン独自のエートスが失われるのではないかという点。サーフィンは、いわゆる自由な感じのイメージがあると思うのですが、そういったサーフィンのコアな要素、エートスの部分が失われてしまうのではないかという危機感についてです。

3つ目が、男女平等のレガシーがもたらされるのかという点。男女が同じ条件で競技するので、男女平等のレガシーが残る可能性もあるかもしれませんが。これら3つの仮説を立てながら中身を見ていきたいと思います。それで、私自身の分析について述べていきたいと思います。

人口増、市場拡大するか

オリンピックの種目化がもたらすものの1つ目として、人口がふえるかどうか、市場が拡大するかどうかということですが、サーフィンとよく似た性質を持つスノーボードが種目化されたときを例に検討してみます。スノーボードは長野五輪で、1998年に五輪種目になっていくんですが、結果から言いますと、スノーボードは人口がふえていません。むしろ横ばい、下降気味です。

その理由としてよく言われるのが、若者には以前と比べてお金も時間もないということですね。賃金も減ってますし、車も持っていないし、多くの大学生がスキーを楽しんでいたような時代とは全く違うということです。初期投資が高いんですね、サーフィンやスノーボードは。道具を手に入れたあとは、それほどお金がかからないのですが、そういった物を若者がもう手にできないんじゃないかと言われてたりしています。このことから考えると、オリンピック種目化=人口増、収入増とは言い切れないことが推察されます。

それから、組織的な発展や拡大が、五輪種目化を契機として見込めるの

かどうかという点についても考えてみます。スノーボードの場合は、もう一つは、IOCがどこと一緒に大会を開催していこうかというときに、国際スノーボード連盟というものを外して、国際スキー連盟と組んでしまったということがあります。スキーとスノーボードではかなり異なるわけで、スキー連盟が管轄で本当にスノーボードをやっている人たちのパフォーマンスを正確に図れるような、それこそコースであったり、運営であったりができるのかということで、批判をされたと言われています。しかし、最終的には、選手としては出場したいので、ここに出るとすごく知名度も上がるしということで、国際スノーボード連盟からかなり選手が流れてしまって資金難に陥っていったということです。

では、スノーボードをすごくやっている人たちはどこへ行くかという、五輪ではなくて、USオープンであるとか、スノーボードの連盟が主催している大会に出たり、あるいは、競技関係なく、個人やチームでパフォーマンスを表現したりするという方向に行きます。ところで長野五輪で話題になった「腰パン騒動」は覚えておいででしょうか。服の着こなしが非常に「だらしない」とされて、國母選手が猛烈にバッシングされた件です。彼は本当に世界で一番の実力がありながら、五輪のときの直前に大バッシングの嵐の中で、実力は十分発揮できなかったと思うんです。それでメダルはとれなかったんですけど、そういうふう、こういう競技の世界からトップ選手が離れていって、結果的にはさらに高い評価を得ました。よりエクストリームで、断崖絶壁のようなところからおりてくる様子をビデオ撮影する、という方向に行く流れがあったりします。

國母選手は、何年かたってからあの騒動についてどう思いますかと問われたときに、そんなきちんと着こなして、みんなの前できちんとするのはスノーボードじゃないと思ってる」と答えました。だから、全然後悔はないと言っています。そういった既存の社会、権威に抵抗も、スノーボードが持つ要素です。

サーフィンと同時期に、スケートボードも種目化されるのですが、スケ

ートボードも似たような経緯をたどっていきまして、例えば、国際スケートボード連盟というのがありますが、IOCが承認するのは国際ローラースポーツ連盟で、ほかのローラースポーツも含んだ連盟です。スノーボードの前例、それからアスリート自身のことを考えると、この判断は疑問と言わざるを得ません。

さらに、五輪からは離れますが、渋谷区に宮下公園という緑地の公園があって、その公園では、たくさんのホームレスの人たちが集まって日々の暮らしを何とかつないでいる状態であったところに、ナイキのスケートパークができて、その人たちを追い出してスケートパークをつくるというようなことを渋谷区がやったわけです。

そうすると、権威に取り込まれるということ、それで利用されることというのは、スケートボードは、もともとストリートのパフォーマンスなのに、それがストリートの人を追い出すことに使われてしまう。そんな、悲しいというか、語義矛盾というか、そんなことがあっていいのかというふうに思えるわけです。

サーフィンの最近の動きとしましては、確かに選手のメディア露出はふえて、プロサーファーの女性がテレビに取り上げられたり、あと、鳥取県の海沿いの地域では、地域の自治体がサーフスクールなんかをやっていて、その受講生は最近のメディア効果で本当にふえた、倍々にふえていたりするようです。そういった愛好者はちょっとずつふえているかもしれないし、五輪会場である千葉の志田下の周辺には移住者も本当にふえているようです。家族ごと移住するとか、私の知り合いでもお金に余裕がある人は（あのあたり道路も狭くて、ホテルもなくて、どうやって何千人もの人がそこに見に行くのか本当にわからないんですけど）、家を買ったり、マンションを買ったりしています。そういう経済効果は確かにあらわれている。

ただ、身近で聞いた話では、非常に有名な老舗メーカーやショップが倒産していて、全然もうかっていないと聞いています。グローバルなサーフ関連企業は事業拡大のチャンスになるかもしれませんが、スモールビジネ

スは衰退しているのかもしれない。市場拡大と人口増は本当にあるのか、一体誰にとっての市場拡大なのかというのは、これからよくウオッチしていかなくてはならない部分じゃないかなと思っています。

エートスの喪失？

2つ目ですけど、サーフィンのエートスの危機というものです。まずはサーフィンの性質を紹介していきたいんですけど、オリンピック種目になることをサーファー自身はどんなふう考えるかについてですが、私自身は種目化にならなければいいのにとったりもするんですが、それは結構世代差があって、若手の人たちは、若手が活躍できる場所だから、いいんじゃないかという人もいたり、あるいは、海が混むようになったら嫌だから、ならないほうがいいと言われてます。

1990年代半ばぐらいに、スポーツ研究がしたいから、サーフィンのことを調査するんだと周りに話したら、先輩のサーファーたちに、「おまえ、ばかじゃないか、サーフィンはスポーツじゃねえ」みたいな感じで怒られたりしたんですけど、それから考えたら、かなりスポーツに寄ってきていると感じます。

ただし、サーフィンの持つ、その自由さとか抵抗文化といった要素は、サーファーのエートスでもあります。エートスというのは、社会学者のマックス・ウエーバーによると、生活態度とか倫理規範という意味がこめられた概念ですが、そういったコアな要素、サーフィンをサーフィンたらしめるようなものというのが、近代スポーツになって失われるかもしれないということについて、ちょっと見ていきたいと思います。

サーフィンのエートスということを紹介するために、2つぐらい先行研究を紹介します。1つは、「ライフスタイルスポーツ」という、ベリンダ・ウィートンが書いた本です。1960年代、70年代に対抗文化的なものに基づいた、サーフィンのみならず、例えば、スケートボードとかBMXとかを含めてですが、ライフスタイルとかアイデンティティに非常に重い投資をす

る、非常に重い献身的なかわり、コミットメントがあるということです。

サーフィンはそういった要素を確かに持っています。似たことばとして、ロバーツ・ラインハートはエクストリームスポーツという表現をして、ラディカルで、非日常的、普通ではない性質をエクストリームスポーツは持っているし、あとは、日常からの逃避、役割からの逃避、そういったもの、あるいはエキゾチックな土地への旅のような、日常を超えてくような要素、それから、国境を越えた仲間意識みたいなもの、新しい秩序形成、そういったものを持っていると言っています。オリンピック種目になったら、そういった性質が失われるかもしれないということです。

サーフィンのエートスが表現されているものとして、例えば「エンドレスサマー」という60年代につくられたサーフィンのドキュメンタリー的なフィルムですけど、サーフィンしてる人だったらほとんど見てるような映画があるんです。これはタイトルの通り、永遠の夏を求めて世界中を旅するのです。サーファーのあこがれが詰まってるようなフィルムです。だから、確かに、オリンピックみたいに数量化されて、短い時間で決められた場所でやるのは、こういう精神を失ってしまう可能性がある。

でも、本当にそうだろうかということをちょっと問うてみたいと思います。なぜなら、サーフィンはメインストリームスポーツに乗ることを嫌いなながらも、同時に、団体競技とかコンペティションに関しては非常に早い段階からプロ組織なんかをつくってやっている。それから、非常にマッチョな男性性とか、古い役割の再生産とか、中産階級の白人の西洋人的なのがコア層であったりして、何か自由と言いつつも非常に自由じゃない要素みたいなものをたくさん実は持っているということです。

最近では、批判的研究がまとまって出てきたので、サーフィンを、自由とか、いわゆるいいイメージばかりではなく、批判的に捉える研究を少し紹介してみたいと思います。

これまでサーフィン研究は、サーフィンの歴史って言われてきたものは、もともとミクロネシアの島国で行われていたものが、キャプテン・クッ

クがハワイを発見して、サーフィンをしている人たちに驚いて、それで、いろんな国の宣教師たちがサーフィンを禁止して、しかしその後、デューク・カハナモクというストックホルム五輪の水泳選手がメダルをとって、世界中の地域で、この人が余暇にサーフィンをしたことで、たくさんの人を魅了して、サーフィンは再生していったという物語がよく言われるんですが、これが大いに今批判されています。動画を参考に説明します。

(動画再生)

説明をします。一瞬の場面なのですが、これはエンドレスサマーの一画面で、二人の若いオーストラリアとアメリカ人のサーファーが、いわゆるこういうポリネシア系の「未開」の国にサーフィンをしに行くんです。サーフボードなんか見たこともない子どもたちがわっと集まってくるんですよ。そうすると、この中で、子どもたちは、それでも海で、トタン屋根の破片とかでボディサーフィンをしていたり、サーフィンをしたりしているんですけど、サーフボードは初めて見るから、みんなめずらしくて集まってきます。白人の二人のサーファー、マイクとロバートが、子どもたちをサーフボードに乗せてあげるんですね。その子どもたちが乗った映像も出てくるんですけど、そうすると、どういうナレーションが入るかと言うと、「アフリカの子どもが世界で初めて波に乗りました」と言うんです。いやいやと。直前の映像で、トタン屋根で十分サーフィンはしてるんですよ。

もともとサーフィンはどこの地域にもあったものなのです。いろんな地域、それこそ日本でも、今、中国でもあったと言われてるんですが、波に乗るという行為をハワイアンから収奪をして、再解釈をして、商品化したということです。もともといろんな人がやっていたのが、なぜか歴史から消されていって、デューク・カハナモク以降から歴史が始まることになってしまっているんです。そういうアメリカ帝国主義的なあり方を非常に批判する研究が今多く出てきて、ハワイアンの人たちにとったら、ずっと禁止されてもやってきてるんです。それがいつの間にか消されて、ハワイアン女性もやっていました。それがいつの間にかフラガールになっていく。

そういうふうにはサーフィンの歴史から消されて、あたかも白人の人が未開の地に行き紹介をしてあげて、未開へのまなざしでもって初めてサーフィンを開花させるみたいなストーリーを今でもサーフィンのメディアは本当に繰り返してつづいていく、こういうことを今サーフィン研究者は批判をしています。

結局、私がここで何を言いたかったかと言うと、サーフィンというのは常にラディカルさとかカウンターさというのを利用して拡大してきた。その自由さみたいなものを持ちつつ、非常に帝国主義的で、非常にコンペティティブで、そういうものを持ちながら、そのイメージを利用してきたと言えるんだと思います。

なので、サーフィンのオリンピック化というのは、要するに何かというと、アメリカ化したサーフィンがますます広がっていくということで、アメリカ帝国主義的なカルチャーの強化になるんじゃないかと言うことでできるんじゃないでしょうかということなんです。

なので、エートスの喪失の危機か。そういう部分はあるかもしれないけれど、サーフィンは常にそういうものを利用してきたので、それによって失われるというよりも一部分がより強化されていくんじゃないかという考えです。

男女平等のレガシー？

3つ目になります。オリンピック種目化がもたらすもの、これはジェンダーにかかわる一番コアな部分で紹介したいところですが、男女平等のレガシーの可能性についてです。

確かに、オリンピックは男女同数で戦われます。これはふだんのサーフィンの大会とは大きく違います。それから、時間・空間も、男性と同じ平等な条件で行われます。これも結構ふだんの大会とは違って、女性は今まで波の悪い時期、波の小さいところで行われていたのが、今度は同じ条件ということになります。

最近では、世界のプロサーフィンの連盟の要職に女性の役員がつか

とで、かなり男女平等が進んできたことがわかります。2019年以降は、世界サーフィン連盟で行われる、トップの選手だけですが、その大会では男女同額ということが決定されました。それから、2020年以降、カリフォルニア州では、全てのスポーツイベントが男女同額という流れがあるので、かなり、そういうオリンピックからも平等のレガシーが受け継がれる可能性があります。

というのは、さっき小林先生のところでも紹介があったように、参加者比率がかなり半分ぐらいにオリンピックは近づいてきたし、あらゆる差別を禁止することがオリンピック憲章で定められています。だから、こういうものが残る可能性はある。

しかし、近代スポーツは、それと同時に非常に性別二元体制を持っている。性を男女のどちらかに分類して、生まれながらに、セックスジェンダーやセクシュアリティが結びつけられている。つまり、男なら男らしくて女を好きになるだろうという想定が、近代スポーツの特徴としてもあるということ。

そう思うと、性別で分けることは、もちろん平等に扱われるという場面もありますけれども、オリンピックもそうやって性を分けることで女性の参加を拡大してきたわけですけど、分けることによって常に男性と戦うことはなくなるわけです。常に近代スポーツは、男性の身体性に有利な競技が取り入れられているので、常に男性と比較されて、女性のパフォーマンスは男性より劣るよねという二流扱いから逃れられないということです。

なので、分けることで参加の拡大はしたけれども、その分けることの影の部分もあると。サーフィンが近代スポーツ化するというのは、平等が進捗することでもあるかもしれないけれど、この性別二元体制が非常に強化される恐れもあるわけです。

女性のモノ化表現

ジェンダー・セクシュアリティ研究から、上記で述べてきたことを批判

しながら、最後に可能性について論じていきたいと思います。

サーフィンは、非常に女性のモノ化、性差別主義、異性愛規範、非常に有害な男らしさを学ぶ場所ということが、ジェンダー・セクシュアリティ研究の研究者からは強く批判されている部分です。

例えば、どんな表現があるかと、CM動画があるので再生してみましょう。

(動画再生)

これを見ていただきたいんですけど、これはロキシープロと言いまして、ロキシーという女性のサーフブランドのトップブランド、アメリカのカリフォルニアのブランドです。これはロキシーが主催、スポンサーする「ロキシープロ2017」というフランスのビアリッツで開かれた大会のCMです。

今、上半身裸の女性が起き上がって携帯で時間を見て、それから、上着を羽織って、波チェックをパソコンでして、それから、服をぱらっと脱いでシャワーを浴びると。金髪のどうも美しい女性だなということがうかがい知れる。

それから、この女の人はサーフボードを持って車に乗り込んで、どこかに行く。多分海に向かっているんでしょう。ずっと、そのまま顔は映りません。こんな町中を裸足で運転することは余りなさそうですけど、裸足で出てきまして、ついたところが海です（実際には、海の目の前まで車で行けることは、あまりないです）。女性がテントに入っていきますが、どうも選手のように。ワックスアップして、水着から、これはゼッケンのかわりにラッシュガードを着るんですけど、ラッシュガードを着ます。そうすると完全にこの人は今からサーフィンの大会に出るんだなということがわかると。今から、大会に向けて、この人は沖に出ていって、パドルアウトして乗るかしたら、すばらしいパフォーマンスが見れるかしらと思ったら、ここで終わりです。

これ、じゃあ、選手風のモデルさんかしらと思いますよね。違うんです。この人は、本当に何回も世界のトップの座を持っているステファニー・ギルモアという選手です。顔も出ません。乗ってるところも出ない。これを

ロキシーがつくってしまうような状況。

これに対して、研究者とサーファーたちが、「ロキシー、ストップ・ユア・オールセックス、ノー・サーフ・アッズ」というキャンペーンを展開して、こういうCMを流すんだったら、私たちはロキシー製品を買いませんよという不買運動をしました。

これはアメリカとかヨーロッパで話題になったんですが、日本のメディアはこれを一切取り上げませんでした。私はリアルタイムでは知らなかったんです、このニュースを。日本のサーフメディアの報道の偏りも感じます。いずれにせよ、こういうことからわかるのは、サーフィンの競技の世界にも、性差別主義的な表現が満ちあふれているということです。

そうしますと、男女平等のレガシーの可能性、大きいイベントをやれば改善していくのかと言うと、当たり前ですけど、オリンピック種目になるだけでは、そういうことはなりません。むしろ問題が隠ぺいされて、女性が利用されるかもしれないということが言えると思います。

サーフフェミニズムの可能性

それでは、どういうものをゴールにしたら、この種目のジェンダー平等がより進んでいくのかを最後に検討してみたいと思います。

1つの提案が、これはクリスタ・コマーというアメリカの研究者が提唱した概念で、サーフフェミニズムと言います。これはサーフィンを通じた女性のエンパワーメント、女性の表象をふやしていくことを目指す概念です。さっき、小林先生の発表が先にあったのですが、メディア表象も女性の臀部を見せるだけでなく、きちんとサーフィンをしているところを見せるということですね。

さきほどのCM、そういえば奇妙ところがもう一個あって、サーフィンに行く前にシャワーは浴びません。ぬれますから。おかしい表現です。女性の裸を「サービスショット」のように扱うのは、女性のモノ化です。女性への差別や抑圧の意識化をしてくださいよということをクリスタ・コマ

ーは言っていて、サーフィンの世界が目指すべきゴールとしてふさわしい提言ではないかと考えています。

こういうある種の理想を実現したものとして、私自身が参加したイベントを紹介してみたいと思います。

1つは、バタフライエフェクトという2007年からマウイ島で始まったイベントです。今スライドに映っているのが、創設者のタチアナ・ハワードというプロウインドサーファーの女性です。イベントでは、女性がさまざまなオーシャンスポーツをし、海辺で一日を楽しみます。バタフライエフェクトという名前のとおり、小さい羽ばたきは世界中に影響を与えるという意味で、平和で、持続可能で、地域に利益が還元されるような、小さなイベントが世界中にいい影響を与えていくことを望んで行われます。現在では19カ国でやっていて、何千人もが毎年参加しています。

このイベントは、実は、そこに来ていらっしゃる掘さんに、フェイスブックのお友達で研究仲間ですけど、教えてもらって、水野さん、興味があるんじゃないかと思ってと紹介をしてくれました。それで、私はそれに参加してみたんです。

マウイにはプロウインドサーファーの岡崎友子さんという人がいらっしゃって、岡崎さんが日本で初めて2016年に開催しました。心温まる雰囲気、イベントの初日からヨガしながら泣いてしまう人がいるくらいです。そう聞くと何か変な集まりのように聞こえるかもしれませんが、オーシャンスポーツを、男性ばかりの中で続けるのは楽しいことばかりではなくて、そういう思いをして、長年、自分の場で続けてきた人が、ここに一堂に集まると、何とも言えない連帯感が満ちあふれてしまうのだと思います。女性がエンパワーメントされるし、友情が深まるし、ここで友達ができて、よし、自分も自分のところに帰って、またスポーツを頑張ろう、あるいはいい影響を周りに与えていこうということを信じて、誓って、帰る。それで、また次の年に集まるといことが繰り返し広げられるわけです。

それから、最後もうひとつだけ。これは、私が実は先月参加したボート

トリップで、女性だけとするサーフィンの船旅です。1週間、この船からほとんど下りないんです。靴は一度も、ビーチサンダルすら履かない生活で、ずっと船で生活をして、朝も晩もサーフィンをするのです。

モルディブの波は割と大きな波で、経験もないので怖さもあります。それでも、お互い励まして、励まして、日々を楽しみます。船底に寝るんですけど、二段ベッドに。カビ臭い、天井がこれぐらいしかないようなところで寝るのも、みんな爆笑で乗り切っていくというようなことをする。

このボートトリップに私が参加できたのは、さきほどのバタフライで出会った女性プロサーファーが誘ってくれて、その人が企画をしたからです。そういう影響が続いていく、スモールイベントの本当のよさを実感するような日々です。

サーフィンの未来をクリアする

もう一つ、サーフフェミニズムに加えて、このサーフィンの世界がゴールにすべき目標として、サーフィンの未来をクリアすることを挙げたいと思います。これは、異性愛主義、異性愛規範を当たり前にしないうり方を、もっともっと進めていくべきであるということを意味します。

例えば、どういう試みがあるかと言うと、私は2016年にサーフィンソーシャルカンファレンスというサーフィンの学会に参加しました。これは世界で初めてのサーフィン学会だっと思っています。この学会があるよと、またフェイスブックで教えてくれたのが井谷さんだったということで、ここにいる人たちの友情にも助けられ、私はここに参加することができました。詳しい話は、いま本に書いてるところなので、また興味があったら見ていただきたいのですが（『ただ波に乗る Just surf』晃洋書房、2020年4月刊行）、この学会で知り合った人たちと一緒に本をつくることができました（*Surfing, sex, genders and sexualities*. Edited by lisahunter, Routledge, 2018）。さまざまな面でマイノリティに対する配慮が行き届いていました。私はアジアから参加した唯一の研究者でしたが、女性研究者たちがきめ細か

くサポートをしてくれて、おぼつかない英語なのに英語の著書に誘ってくれました。今までにない学会のスタイルに触れ、新しい目が開かれた思いです。

それから、このカンファレンスのすばらしかったことの一つは、よく学会の合間に映画上映があると思うんですけど、そのときに、ゲイサーファーの映画を上映したことです。サーフィンの世界も異性愛規範が非常に強くて、性差別主義が非常に強い世界で、サーファーがゲイであることをカミングアウトは本当に恐ろしいことです。こうした中で、2014年に公開されたこの映画では、たくさんの人たちがカミングアウトをします。また、この映画をつくった人がつくったトーマス・キャストツは、ゲイサーファードットネットというサイトを開設しました。ゲイのサーファーたちが安心して、危険な思いをせず、嫌がらせも受けず、友情や恋愛などの出会いの機会を得ることができるようになりました。そういうものが、今、少しずつ始まっているところということです。

まとめ

最後に、まとめたいと思います。

今、こういうふうに見てきて、さまざまに種目化されることで評価したい部分ももちろんあるのですけれども、市場が拡大するかも、あるいは平等レガシーが残されるかもということもあるんですが、同時に、サーフィンを余りにも美化して、抑圧や暴力性を無視した評価をするのはやはり無意味だと私は思います。

そういうことを見つめた上で、どういうふうに表示をしていくのが大事ということです。

それから、多様性と公平性の促進、ジェンダーのみならず、セクシュアリティに関しても、エスニシティーに関しても、平等、公平性が、どんなふうに進められるかをやはり考えなくてはいけないということです。

それから、メガイベントもいいかもしれませんが、やっぱり私自身が一番エンパワーされるのは、今御紹介したようなスモールイベントです。こ

ういったものは本当に参加者主体であるし、後々につないでいかれていく
きずなみたいなものもできるし、スポーツも促進させるんじゃないかと思
っています。

ありがとうございました。